

V) 病害虫発生経過の概要及び発生原因の解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	苗立枯病	平年並	平年並	4月中旬から県下各地で発生がみられたが、平年並みであった。主な病原菌はトリコデルマ菌、フザリウム菌であった。	—	育苗箱での薬剤の土壌混和、灌漑が行われた。
	苗いもち	平年並	やや少ない	全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	汚染種子の割合が低く、発生が抑制されたものと考えられる。	
	葉いもち	遅い	少ない	初発生は平年より遅く6月17日であった。初期の病勢は極めて緩慢で、全般発生期も平年に比べて3半旬遅く、7月第3半旬となった。また、7月第4半旬には平年並みに梅雨が明け、以後高温小雨傾向となったため、病勢は活発化することなく終息した。7月下旬の巡回調査における平均発病株率は0.5%と平年値37.4%を大きく下回り、ここ10年間で最も低く、全般の発生量も平年に比べて少なかった。	置き苗での発生は巡回調査においては確認されず、伝染源量は少ないものと推察された。また、例年病勢が活発化する6月の気象は、BLASTAMによる感染好適日の出現日数がのべ3日(平年値14.9日)に留まったことから、本病の初期進展に抑制的に作用したのと考えられる。	常習発生地域では、育苗箱施薬や粒剤の本田散布が行われた。なお、前年MB I-D剤耐性菌の確認された地域では当該薬剤の使用が控えられた。
	穂いもち	遅い	少ない	罹病性品種のコシヒカリで僅かに発生圃場がみられるだけで、全般の発生量は平年に比べて少なかった。	葉いもちの発生が極めて少なく、伝染源量は僅少であったため、発生が抑制されたものと考えられる。	常習発生地域では、育苗箱施薬や本田での粒剤施用が行われた。
	紋枯病	平年並	やや多い	初発生は平年並みの6月14日に認められた。巡回調査圃場では、7月中旬以降、病勢が活発化し、7月下旬には発病程度の高い圃場もみられた。早生種では上位進展も活発で止葉葉鞘にまで病斑形成が及んだが、主要品種コシヒカリでは8月下旬以降、上位進展は顕著に鈍化した。全般の発生量は平年に比べてやや多かったが、発病程度はやや低くなった。	7月中旬以降病勢が活発化したのは、周期的に降雨があったことに加え、茎数が過去最多となったことから、株内湿度が確保され、病勢進展に好適な条件となったことによると考えられる。8月下旬以降の上位進展の鈍化は、気温低下と少雨による湿度低下に起因すると考えられる。	常習発生地では育苗箱施薬が行われた。また、発生に応じ出穂期までに薬剤散布が行われた。
	白葉枯病	—	平年並	作期の遅い品種を中心に発生が見られ、全般の発生量は平年並みであった。	作期の遅い品種の主要品種である祭り晴は本病耐病性が低いことから、発生がみられたものと考えられる。	常習発生地の一部で薬剤散布が行われた。
	馬鹿苗病	平年並	少ない	全般の発生量は平年に比べて少なかった。	種子の保菌率が低かったことや、種子消毒が徹底したことなどにより発生が抑制されたものと考えられる。	専用の種子消毒器を用いた吹き付け処理を中心とした種子消毒が行われた。
	ごま葉枯病	平年並	やや多い	県下各地で発生がみられ、葉身の発病、穂枯れとも発生量は平年に比べてやや多かった。	出穂期以降高温多日照の傾向が続き、感染が助長されたものと考えられる。	穂いもちとの同時防除として薬剤散布が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	すじ葉枯病	平年並	平年並	県下各地で発生がみられたが、発生量は平年並みであった。	—	穂いもちとの同時防除として薬剤散布が行われた。
	黄化萎縮病	—	少ない	常発地の一部で僅かに発生が認められ、全般の発生量は平年に比べて少なかった。	生育前半の感受性が高い時期に浸感水がなく、感染機会が少なかったため、発生が抑制されたものと考えられる。	常発地の一部で薬剤防除が実施された。
	縞葉枯病	平年並	少ない	県内の一部で発生がみられた。	媒介虫であるヒメトビウンカの発生量が少なかったことに加え、近年本病の発生が少なく保毒虫率も低いと推察されることから、少発生になったものと考えられる。	特に防除は行われなかった。
	萎縮病	平年並	少ない	県内の一部で発生がみられた。	近年、本病の発生が少なく、保毒虫率が低いと考えられるため、少発生となったものと考えられる。	特に防除は行われなかった。
	黄萎病	—	—	生育期間、再生稲とも発生を確認することはできなかった。	—	—
	籾枯細菌病	平年並	やや少ない	本田での発生は平年に比べてやや少なかった。	出穂期前後の気温は高かったが、降水量は少なく感染には抑制的であったと考えられる。	採取圃場では、出穂期を中心に薬剤散布が行われた。
	ヒメトビウンカ	平年並	少ない	5～6月下旬の払い落とし調査では、虫数、発生圃場率ともに低く、全般の発生量も平年に比べて少なく経過した。	越冬量の減少と本田初期害虫との同時防除で発生が抑制されたと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時にはいもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	ツマグロヨコバイ	平年並	やや多い	第1世代成虫の発生時期は平年並であった。払い落とし調査では6月までは発生虫数、圃場率とも平年に比べて少なかったが、7月以降は発生量が増加し、一部では多発生の圃場が見られた。	越冬量が少なかったため前半の発生量は少なかったが、全般に気温が高く推移したために圃場での増殖が盛んとなった。この結果、収穫期には発生程度の高い圃場が多くなったと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時にはいもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	ニカメイチュウ 第1世代 第2世代	平年並 平年並	少ない 少ない	予察灯及びフェロモントラップにおける発蛾最盛期は、第1世代成虫が5月中下旬、第2世代成虫が7月下旬で平年並みであったが、総誘殺数は第1世代、第2世代ともに少なかった。圃場における被害は第1世代、第2世代ともに少なかった。	前年の発生から、越冬量は少なく、また春先から気温が高く各世代の発生も早まったが、箱施薬などの防除対策が行われたため、被害は抑えられたものと考えられる。	常習発生地では薬剤散布が行われた。
	イネヌグサウムシ	やや早い	やや少ない	予察灯における越冬世代成虫の初誘殺は、平年に比べてやや早い4月第6半旬に認められたが、誘殺数はやや少なく、5月下旬の巡回調査では、発生圃場率、被害株率とも平年に比べてやや少なかった。	越冬量の減少と本田初期害虫との同時防除で発生が抑制されたと考えられる。	育苗箱施薬が行われた。多発田では本田防除が行われた。
セジロウンカ	平年並	平年並	予察灯での初飛来は平年並みの6月下旬から見られ、6～7月の飛来量は平年並みであった。これに由来する幼虫は7月下旬から発生し、発生量はほぼ平年並みであった。	7月中旬から8月は気温が高く経過し、増殖に好適な状況であった。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時に葉いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。	

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	トビイロカ	平年並	平年並	予察灯での初飛来は7月第3半旬に見られ、飛来量は平年に比べてやや多かった。これに由来する幼虫は8月上旬から発生し、発生量はほぼ平年並みであった。収穫期に成幼虫密度が高い圃場が一部で見られた。	7月中旬から8月は気温が高く経過し、増殖に好適な状況であった。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時に葉いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	コブノメイガ	平年並	平年並	予察灯での飛来時期、飛来量ともに平年並みで、次世代の発蛾盛期は8月第2半旬であった。被害株率、発生圃場率はほぼ平年並みであった。	次世代発蛾盛期には、大部分の水稻は出穂しており、その後の被害発生は少なかったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	斑点米カミシ類	平年並	やや多い	畦畔雑草すくい取り（6月下旬）、極早生品種出穂時（7月下旬）、コシヒカリ出穂時（8月上旬）の調査では、平年に比べてやや多い発生が認められた。主な発生種はアカスジカスミカメ、ホソハリカメムシで、本年はクモヘリカメムシの発生が早い時期から認められた。	生育期間の気温が高く、降水量も少ないなど好適な条件が続き、発生量は平年に比べて増加したと考えられる。	7月20日付けで注意報を発表し、草刈りなどの圃場管理の徹底や、発生に応じて穂揃い・乳熟期～糊熟期に薬剤散布が行われた。
	イトヨリス	平年並	少ない	5月下旬における本虫の被害は平年に比べて少なかった。6月下旬には山間部を中心に発生圃場が認められた。	越冬量の減少と本田初期害虫との同時防除で発生が抑制されたと考えられる。	育苗箱施薬のほか、多発生圃場では本田散布も行われた。
	イネツトムシ	平年並	やや多い	第2世代幼虫による被害がやや多く、特別栽培米晩生品種圃場の一部で被害が多発した。	葉色が濃い晩生品種の圃場に加害が集中したと考えられる。	発生程度に応じて防除が行われたが、特別栽培米圃場では薬剤による防除は行われなかった。
	フタヒコヤカ	平年並	少ない	予察灯での成虫の誘殺数は平年に比べて少なく、圃場での幼虫による被害は平年に比べて少なかった。	—	特に薬剤防除は行われなかった。
	アワヨトウ	—	少ない	飛来は確認されなかった。	—	特に薬剤防除は行われなかった。
	イネゾウムシ	平年並	やや少ない	越冬世代成虫による葉の被害量は平年に比べてやや少なかった。	—	イネミズゾウムシとの同時防除として育苗箱施薬が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ムギ	小さび病	平年並	平年並	5月中旬から発生がみられるようになった。全般の発生量は平年並みであった。	—	とくに防除は行われなかった。
	赤さび病	平年並	平年並	4月下旬から発生がみられるようになった。その後病勢はやや活発化した。全般の発生量は平年並みであった。	病勢がやや活発化したのは4～5月の日照時間が多くなり、感染に好適な気象条件となったためと考えられる。	とくに防除は行われなかった。
	黄さび病	—	—	発生を確認することはできなかった。	近年発生は全くみられない。	—
	黒さび病	—	—	発生を確認することはできなかった。	近年発生は全くみられない。	—
	うどんこ病	—	少ない	全般の発生量は平年に比べて少なかった。	近年発生量が少なく、菌密度が低下しているものと考えられる。	本病を対象とした薬剤散布は行われなかった。
	赤かび病	遅い	少ない	主要品種アサカゴールドでは巡回調査において発生が確認されず、全般の発生量は平年に比べて少なかった。	出穂期以降降雨がやや少なかったため、感染が抑制されたものと考えられる。	開花期（オオムギは穂揃期）とその10日後に薬剤散布が行われた。
ダイズ	紫斑病	平年並	やや少ない	収穫子実における発生量は平年に比べてやや少なかった。	生育期後半～収穫期にかけて降水量が平年並み～やや少なく、発生が抑制されたものと考えられる。	一部の圃場で薬剤散布が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや早い	やや多い	フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は7月まで累積誘殺数が多く、その後も飛来が続き、9月末には平年の1.2～2.0倍となった。圃場での白変葉の発生はやや早く、8月上旬から認められた。8月末の白変葉数はやや多く、発生圃場率は高かった。全般の発生量はやや多かった。	成虫の飛来量が多かったため、8月の寄生密度は多かったものと考えられる。その後、薬剤による防除が行われたため発生量はやや多い程度になったものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。9月1日には注意報を発表した。
ナシ	黒斑病	やや遅い	少ない	初発生は5月10日で平年よりやや遅かった。病勢は全般に緩慢であり、発生量は、平年より少なかった。	5月中旬から6月下旬にかけて降水量は少なく、発生には抑制的であり、平年より少なくなったものと考えられる。	袋がけ時期を中心に薬剤散布がよく行われた。以後、収穫期まで薬剤散布が行われた。
	黒星病	平年並	少ない	発生時期は平年並みであった。発生量は平年より少なかった。	5月中旬から7月下旬にかけて降水量は少なく、発生には抑制的であり、平年より少なくなったものと考えられる。	開花期から袋かけ期を中心に防除が行われた。
	赤星病	やや遅い	やや少ない	初発生は4月26日で平年よりやや遅かった。全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	冬孢子堆の100%成熟日は平年よりやや早い4月11日であった。3月下旬から4月下旬までの降水量が平年より少なかったため発生は抑制されたものと考えられる。	開花期を中心に防除が行われた。
	ハダニ類	平年並	やや少ない	ハダニ類の発生量は当初やや少なかったが6月下旬に増加したが、その後やや少なくなった。全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	カンザワハダニの越冬量はやや少なく、生育初期の発生量はやや少なかった。しかし、6月は気温が高く、降水量は少なく経過し、増殖に好適な条件が続いた。7月上旬から中旬にかけて降雨の日が多くやや少なくなった。8月以降もやや少ないまま経過した。	5月下旬～6月、7月上旬、8月上中旬を中心に薬剤散布が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ナシ	モシクイ	平年並	やや多い	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期は平年並み、誘殺数はやや多かった。果実の被害は全般には平年並みであったが、一部被害の多い圃場がみられた。	前年の発生がやや多く、越冬世代成虫の発生量がやや多かったと考えられる。また、4月の気温は高く、5月は低かったため発生時期は平年並みとなった。発生量は多かったが、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなったと考えられる。	ナシヒメシンクイ、ハマキムシ類との同時防除が行われた。
	ナシヒメシンクイ	平年並	やや多い	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期は平年並み、誘殺数はやや多かった。果実の被害は全般には平年並みであったが、一部被害の多い圃場がみられた。	3月中下旬は気温が低く、4月上旬は気温が高かったため越冬世代成虫の発生時期は平年並みであった。越冬量もやや多かったことから、各世代の発生量もやや多くなったものと思われる。しかし、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなったと考えられる。	小袋掛け前に他害虫との同時防除が行われた。
	アブラムシ類	やや遅い	やや多い	4月下旬の寄生梢率、寄生程度はやや低く、5月下旬には寄生新梢率、寄生程度ともやや多くなった。全般の発生量はやや多かった。	3月下旬の気温が低く経過したため、初期の発生量はやや少なかった。4月以降は高温で経過したため発生量も多くなったが、薬剤散布の影響もあり平年並みとなった。全般の発生量もやや多かったと考えられる。	5～6月に薬剤散布が行われた。
	ハマキムシ類	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップでのチャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生時期は越冬世代で、やや遅かった。チャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや少なく、幼虫による被害はやや少なかった。	3月は気温が低く、越冬世代の発生時期はやや遅くなったと考えられる。4月以降の気温は高く経過し、第1世代以降の発生は平年並みとなったと考えられる。	他害虫との同時防除が行われた。
	クワコカクモン	—	少ない	全般の発生量は少ない。	—	防虫果袋が使用された。
ブドウ	晩腐病	平年並	少ない	7月に入り、巨峰、ピオーネ等の大粒種を中心に発生が見られたが、病勢は緩慢で、発生量は平年より少なかった。	防除効果の高い薬剤が適期に散布され、平年より少なくなったものと考えられる。	他病害との同時防除が行われた。
	さび病	—	—	発生は確認できなかった。	6月に降水量が少なく、発生が抑制された。	他病害との同時防除が行われた。
	褐斑病	平年並	少ない	6月下旬に初発を確認した。発生量は少なかった。	6月に降水量が少なく、発生が抑制された。	他病害との同時防除が行われた。
	べと病	やや遅い	少ない	露地栽培のデラウェアでは7月に初発を確認した。発生量は平年より少なかった。	6月に降水量が少なく、発生が抑制された。	露地栽培を中心に薬剤防除が行われた。なお、施設栽培ではビニル被覆除去後行われた。
	黒とう病	平年並	少ない	露地のピオーネで発生が見られたが、全般の発生量は平年より少なかった。	—	露地栽培を中心に薬剤防除が行われた。
	灰色かび病	平年並	やや少ない	早期、普通加温のデラウェアを中心に発生がみられたが、発生量はやや少なかった。	6月に降水量が少なく、発生が抑制された。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	チャノキアザミウマ	平年並	多い	ハウス栽培デラウェアの圃場で4月下旬に発生が認められた。5月下旬以降増加し、発生量が平年に比べ多くなった。	4月下旬の初発生は昨年11～12月の気温が高く、園内で越冬した個体が多かったためと考えられる。露地園に設置した粘着トラップでの誘殺数はやや少なく推移しており、ハウスデラウェア園への侵入は多くはなかったと考えられるが5月下旬以降ハウス内の気温は増殖に好適であったため、発生量が多くなったと考えられる。	開花期から幼果期に薬剤散布が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ブドウ	ハダニ類	やや早い	やや多い	4月下旬から発生が認められ、5月下旬以降やや多くなった。発生量は6月下旬以降やや多くなった。一部の圃場で葉の黄化、早期落葉が認められた。全体の発生量はやや多かった。	薬剤散布は、汚染、花粉の溶脱のため初期以外にほとんど行われないことから、ハウス内の気温が好適になるとともに増殖が盛んとなったものと考えられる。	
	フタテンヒメヨコバイ	平年並	やや少ない	無加温ハウス栽培ブドウでは平年並みの5月下旬から発生が見られ始めた。発生量は初めやや少なく推移したが、収穫終了後の8月以降やや多くなった。	越冬量が平年並みであったことと、チャノキイロアザミウマとの同時防除が徹底し発生量がやや少なくなったものと考えられる。	チャノキイロアザミウマと同時防除が行われた。
	チャノコカクモンハマキ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップでのチャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生時期は越冬世代で、やや遅かった。チャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや少なく、幼虫による被害はやや少なかった。	3月は気温が低く、越冬世代の発生時期はやや遅くなったと考えられる。4月以降の気温は高く経過し、第1世代以降の発生はやや少なくなったと考えられる。	他害虫との同時防除が行われた。
カキ	炭疽病	やや遅い	少ない	果実での発生は7月下旬から予察園で見られた。9月に入り全般に見られるようになったものの発生量は少なかった。	—	一部に無防除や薬剤散布の遅れた園が見られた。
	うどんこ病	平年並	少ない	7月下旬に初発を確認した。その後、県下各地で発生が認められたが、発生量は少なかった。	8月下旬から9月は降水量が少なく、発生が抑制されたと考えられる。	薬剤散布の回数の少ない園や散布の遅れた園も見られたが、全般には適切な防除がなされた。
	円星落葉病	平年並	やや少ない	8月下旬から発生が見られ、一部多発園も見られたが、全般の発生量はやや少なかった。	全般的に降水量が少なく、防除が徹底されたため発生量はやや少なかったと考えられる。	感染時期を中心に薬剤散布が行われた。
	黒星病	平年並	少ない	5月より発生が見られた。全般の発生量は少なかった。	灰色かび病との同時防除の徹底により、発生量は少なかったと考えられる。	感染時期を中心に薬剤散布が行われた。
	灰色かび病	平年並	少ない	5月上旬から発生を確認した。全般の発生量は少なかった。	全般的に風の強い日、降水量ともに少なく、発生が抑制されたものと考えられる。	4月末から5月にかけて薬剤散布が行われた。
	カキミガ	平年並	平年並	果実の被害は一部で多発生圃場が認められたが、全般の発生量は平年並みであった。	防除効果の高い薬剤が適期に散布されたためと考えられる。	各世代発生期に薬剤散布が行われた。
	カキダアザミウマ	平年並	平年並	5月10日に被害捲葉の発生を認めた。発生量は平年並みであった。第1世代成虫は6月第2半旬から粘着トラップに誘殺され、誘殺数は平年に比べてやや少なかった。果実被害は7月中旬から見られたが、被害量はやや少なかった。	越冬成虫の飛来量が平年並みであったこと、成虫飛来時期の薬剤散布と被害捲葉の除去などの防除対策により、果実被害の発生量が少なかったと考えられる。	越冬成虫飛来期の薬剤散布と捲葉の切除が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
カキ	カメムシ類	遅い	少ない	フェロモントラップでは4月29日に、予察灯では4月29日から誘殺された。5月中旬以降の誘殺数は平年より少なく推移した。9月上旬に予察灯での誘殺数は増加したが、その後気温が低くなると減少した。被害果実数は平年に比べて少なかった。	昨年はヒノキ毬果がやや少なくカメムシの越冬量もやや少なかった。本年はヒノキの花粉飛散量が多く、ヒノキ毬果も多かったと考えられる。そのため、カメムシのヒノキ毬果から離脱が遅く圃場への飛来が遅かったと考えられる。	8月下旬に薬剤による防除が行われた。
春夏 メロン	べと病	—	少ない	5、6月の巡回調査では本病の発生を確認していない。	4～6月は降水量が少なく、発生が抑制されたと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	つる割病	—	平年並	全般の発生量は平年並みであった。	罹病性品種に替わって抵抗性品種が導入され、発生は罹病性品種を栽培する一部に限られる。	罹病性品種を栽培する常発地の一部では、土壤消毒が行われた。
	つる枯病	—	やや多い	全般の発生量は平年に比べてやや多かった。	—	薬剤による防除が行われた。
	えそ斑点病	—	やや少ない	県下各地で発生が見られたが、全般の発生量はやや少なかった。	—	常発地では薬剤による土壤消毒が行われた。
	黒点根腐病	—	平年並	全般の発生量は平年並みであった。	—	常発地では薬剤による土壤消毒が行われた。
	モザイク病	—	平年並	全般の発生量は平年並みであった。	—	アブラムシ類に対する薬剤散布が行われた。
	アブラムシ類	—	やや少ない	春作では5月から発生が見られた。発生量は初期にはやや多かったが、その後はやや少なくなった。全般の発生量はやや少なかった。	薬剤により発生が押さえられたと推察される。	定植時とその後は発生に応じて薬剤散布が行われた。
	ハダニ類	—	やや多い	春作では5月から発生が見られた。全般の発生量はやや多かった。	4～6月にかけて日照時間が多く、ハウス内の気温が平年より高めに推移したため、ハダニ類の増殖に好適となり、発生量がやや多くなったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
秋冬 ダイコン	モザイク病	—	やや少ない	9月下旬の発生量は平年並みだったが、その後発生は広がらず、全般の発生量はやや少なかった。	アブラムシ類の発生量がやや少なかったためと考えられる。	アブラムシ類に対する薬剤散布が行われた。
	アブラムシ類	—	やや少ない	発生量は全般的にやや少なかった。	黄色水盤へのアブラムシ類有翅虫の飛来数は8、9月ともやや少なかった。本年はハスモンヨトウの発生が多く、薬剤散布の回数が多く行われたため、やや少ない発生になったものと考えられる。	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
秋冬 ハクサイ	白斑病	—	やや少ない	全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	8月下旬から9月は降水量が少なく、発生が抑制されたと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	軟腐病	—	やや少ない	全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	8月下旬から9月は降水量が少なく、発生が抑制されたと考えられる。	ハスモンヨトウも含め、薬剤による防除が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
秋冬 ハクサイ	黒斑病	—	平年並	全般の発生量は平年並みであった。	—	薬剤による同時防除が行われた。
	モザイク病	—	やや少ない	全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	アブラムシ類の発生量がやや少なかったためと考えられる。	アブラムシ類に対する薬剤散布が行われた。
	アブラムシ類	—	やや少ない	発生量は全般的にやや少なかった。	黄色水盤へのアブラムシ類有翅虫の飛来数は8、9月ともやや少なかった。本年はハスモンヨトウの発生が多く、薬剤散布の回数が多く行われたため、やや少ない発生になったものと考えられる。	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	コナガ	—	少ない	幼虫の発生量は全般に少なかった。	ハスモンヨトウの発生が多く、薬剤が頻繁に使用されたため発生量が少なくなったものと考えられる	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	モンシロチョウ	—	少ない	幼虫の発生量は全般に少なかった。	ハスモンヨトウの発生が多く、薬剤が頻繁に使用されたため発生量が少なくなったものと考えられる	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや早い	やや多い	フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は7月まで累積誘殺数が多く、その後も飛来が続き、9月末には平年の1.2~2.0倍となった。圃場での幼虫の発生は定植直後からみられ、発生量は全般にやや多かった。	成虫の飛来量が多かったため、定植直後の寄生密度は多かったものと考えられる。その後、薬剤による防除が頻繁に行われたため発生量はやや多い程度になったものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。9月1日には注意報を発表した。
夏秋 キャベツ	黒腐病	—	やや少ない	9月下旬になって発生が見られるようになったが、発生量はやや少なかった。	8月下旬から9月は降水量が少なく、発生が抑制されたと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	菌核病	—	平年並	全般的の発生量は平年並みであった。	—	薬剤による防除が行われた。
	株腐病	—	平年並	全般的の発生量は平年並みであった。	—	薬剤による防除が行われた。
	モンシロチョウ	—	少ない	幼虫の発生量は全般に少なかった。	ハスモンヨトウの発生が多く、薬剤が頻繁に使用されたため発生量が少なくなったものと考えられる。	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	コナガ	—	少ない	幼虫の発生量は全般に少なかった。	ハスモンヨトウの発生が多く、薬剤が頻繁に使用されたため発生量が少なくなったものと考えられる	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。



農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
夏秋 キャベツ	アブラムシ類	—	やや少ない	発生量は全般的にやや少なかった。	黄色水盤へのアブラムシ類有翅虫の飛来数は8、9月ともやや少なかった。本年はハスモンヨトウの発生が多く、薬剤散布の回数が多く行われたため、やや少ない発生になったものと考えられる。	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや早い	やや多い	フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は7月まで累積誘殺数が多く、その後も飛来が続き、9月末には平年の1.2~2.0倍となった。圃場での幼虫の発生は定植直後からみられ、発生量は全般にやや多かった。	成虫の飛来量が多かったため、定植直後の寄生密度は多かったものと考えられる。その後、薬剤による防除が頻繁に行われたため発生量はやや多い程度になったものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。9月1日には注意報を発表した。
冬 キャベツ	黒腐病	—	やや少ない	多発生圃場も散見されたが、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	—	薬剤による防除が行われた。
	菌核病	—	平年並	全般的の発生量は平年並みであった。	—	薬剤による防除が行われた。
	株腐病	—	平年並	全般的の発生量は平年並みであった。	—	薬剤による防除が行われた。
	モンシロチョウ	—	少ない	幼虫の発生量は全般に少なかった。	ハスモンヨトウの発生が多く、薬剤が頻繁に使用されたため発生量が少なくなったものと考えられる	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	コナガ	—	少ない	幼虫の発生量は全般に少なかった。	ハスモンヨトウの発生が多く、薬剤が頻繁に使用されたため発生量が少なくなったものと考えられる	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	アブラムシ類	—	やや少ない	発生量は全般的にやや少なかった。	黄色水盤へのアブラムシ類有翅虫の飛来数は8、9月ともやや少なかった。本年はハスモンヨトウの発生が多く、薬剤散布の回数が多く行われたため、やや少ない発生になったものと考えられる。	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや早い	やや多い	フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は7月まで累積誘殺数が多く、その後も飛来が続き、9月末には平年の1.2~2.0倍となった。圃場での幼虫の発生は定植直後からみられ、発生量は全般にやや多かった。	成虫の飛来量が多かったため、定植直後の寄生密度は多かったものと考えられる。その後、薬剤による防除が頻繁に行われたため発生量はやや多い程度になったものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。9月1日には注意報を発表した。
イチゴ	灰色かび病	—	平年並	発生量は全般的に平年並みであった。	—	薬剤は、うどんこ病防除を中心とした同時防除が行われた。
	うどんこ病	—	平年並	発生量は全般的に平年並みであった。	—	薬剤による防除が行われた。
	アブラムシ類	—	やや少ない	促成、半促成栽培における発生量は全般にやや少なくなると推移した。	前年秋期のアブラムシ類有翅虫の飛来数は平年に比べてやや多かったが、本種に卓効の薬剤が使用されたため発生量はやや少なくなったものと考えられる。	定植時とその後は発生に応じて薬剤散布が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イチゴ	ハダニ類	—	やや少ない	促成、半促成栽培における発生量は全般にやや少なく推移した。	—	定植時とその後は発生に応じて薬剤散布が行われた。
タマネギ	べと病	—	やや多い	全般の発生量は平年に比べてやや多かった。	近年、発病が顕著化しており、越年罹病株の発生が多くなったためと考えられる。	越年罹病株の抜き取りと薬剤散布が行われた。
	白色疫病	—	平年並	全般の発生量は平年並だった。	—	薬剤による防除が行われた。
	ボトリチス属菌による葉枯れ	—	少ない	全般の発生量は少なかった。	—	薬剤による同時防除が行われた。
	さび病	—	平年並	全般の発生量は平年並みであった。	—	本病を対象とした薬剤散布は特に行われなかった。